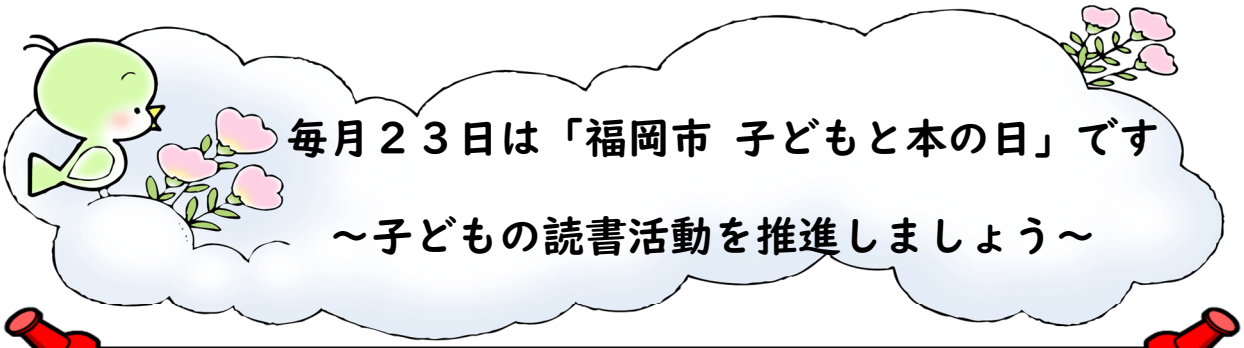


毎月２３日は「福岡市 子どもと本の日」です

～子どもの読書活動を推進しましょう～

読書に親しむ環境づくり～学級文庫を見直そう～

「学級文庫」は、各教室において児童の読書習慣の確立と促進のためにまとめられた蔵書です。教室という１日の多くの時間を過ごす場所に本に親しんでもらう環境を整えることは、子どもたちの読書活動推進のために大変意義があることではないでしょうか。コロナ禍の中、学校図書館に子どもたちが集中することを避けるためにも学級文庫の良さを見直してみましょう。

「学級文庫」の良さを見直す取り組みや、例を紹介します。

☆学校図書館の本を用いた期間限定の学級文庫づくり

現在学習していることに関連した本
季節や行事に合わせた本
子どもたちが読みたい本、興味のある本

上記の例のように、学級文庫を学校図書館の分室のように位置付けて学校図書館の機能を分散させるということも一例として考えられます。

☆総合図書館　「団体貸出」の本を用いた学級文庫づくり

「団体貸出」とは、福岡市総合図書館が福岡市内の地域グループ（団体）を対象に、本の貸出を行うものです。１団体につき 1000 冊まで、3 か月から 6 か月の貸出期間で、それぞれの団体の登録状況に合わせて貸出を行なっています。現在、約 420 団体の登録があり、本の貸出を行っています。蔵書は約 19 万冊で、およそ 3 分の 2 が児童書、3 分の 1 が大人の本です。総合図書館団体貸出用書架から直接本を選んでいただき、配本、回収は図書館が行います。

すでに団体登録している小学校では、学期に１回先生方が来館選書し、学級文庫として活用されています。学校図書館に配架されていない本もたくさんあり、子どもたちの読書活動意欲につながります。詳しいことは総合図書館団体貸出までお問合せください。(092－852－0623)

☆地域・保護者からの本の寄贈で学級文庫づくり

学校が必要としている本や、こんな本を子どもたちに読んでもらいたいという、思いを地域・保護者に話す機会を多くもち、本の寄贈を募りましょう。（ただし、学級文庫に置くべきかどうかをしっかりと考える必要があります。）

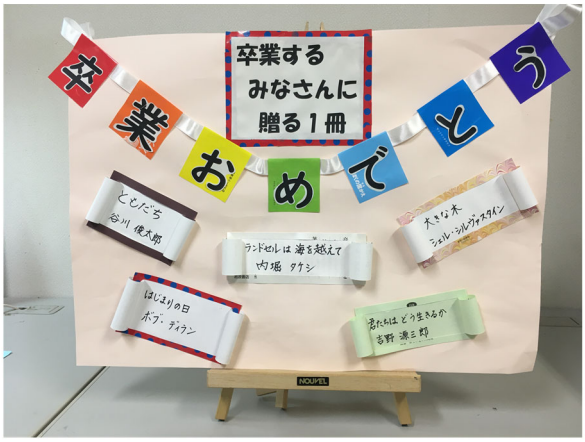
本の帯を使った２月の展示・掲示

『卒業』という言葉が聞かれる時期になりました。図書館にも卒業する子どもたちをお祝いする掲示をしましょう。卒業生は図書館にどんな思い出があるのでしょうか。また、どんな本が心に残っているでしょうか。

本の帯を使った掲示で、卒業する子どもたちにメッセージを送りましょう。

帯の紙は、色や紙質の種類が豊富です。それを活かして、卒業生に図書館ならではの掲示をしてみましょう。

帯の紙はコシがあるので、鉛筆等に巻くとクルクルとかわいい形になります。



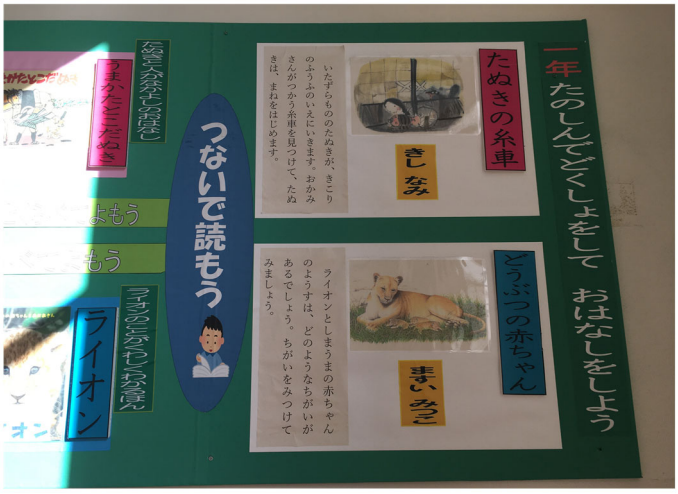
卒業生に贈る1冊は？
夢や未来に向かっていく子どもたちの背中を押してくれるような1冊を紹介したいですね。

Ｈｅｌｌｏ！ 学校図書館

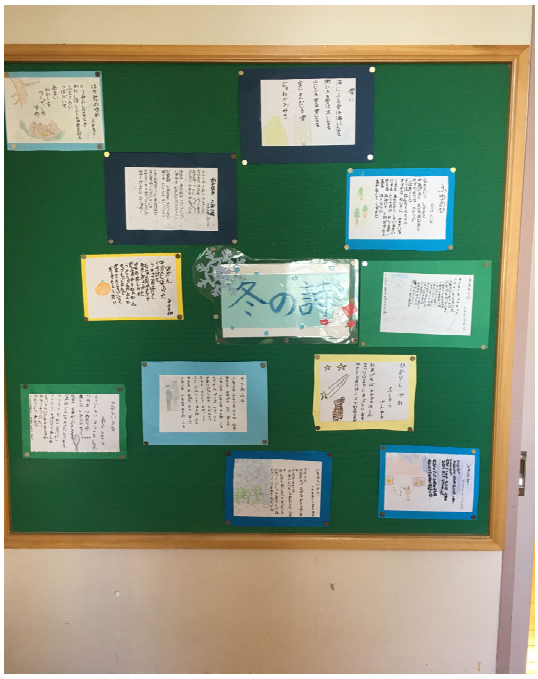
今月は、先月に続き、昨年度「福岡県学校図書館コンクール」で優秀賞を受賞された東光小学校の図書館を紹介します。

先月は、「読書センター」としてのさまざまな取り組みを紹介しました。今月は、「学習センター」「情報センター」としての取り組み、工夫を紹介します。

「学習センター」「情報センター」としての工夫



「つないで読もう」というテーマが全学年の掲示板にありました。学習したことと、読書活動がつながる素敵な呼びかけですね。
作者の名前も大きく紹介してありました。子どもたちは教科書で学んだ同じ作者の本を図書館で探すことでしょう。



新聞を使った学習、学習後の新聞作り、詩作りと、学習した足あとが図書館に掲示されていました。どれもしっかり学習した様子がよくわかり、感心しました。「学習センター」「情報センター」として、学習したことを図書館に掲示することは、子どもたちの読書活動推進のために大切なことですね。

２か月に渡り東光小学校の図書館を紹介しました。
「図書館に行きたい。」「図書館で○○の本を読みたい。」「図書館で調べたい。」など、子どもたちの思いをかなえてくれる、さまざまなところに工夫のある学校図書館でした。子どもたちが、目を輝かせて読み聞かせを聞いている姿も大変印象的でした。読書活動を推進することで、子どもたちの世界が広がっているなと感じました。

3月生まれの文学者

江國 香織（えくに かおり）と「草之丞の話」

東京都　1964年3月21日生まれ

江國氏は、幼い頃、石井桃子氏の「うさこちゃん」シリーズの絵本がとても大好きでした。中学生の時は書くことが好きで友だちと雑誌をつくっていました。その後は、映画の字幕をつける人になりたくて、目白学園短期大学国文科を卒業後、英語の専門学校に行きアメリカへ1年間留学しました。

書くことを仕事として考えるようになったのは、1989年に「409 ラドクリフ」でフェミナ賞を受賞したことをきっかけに、いろいろな出版社から原稿依頼がきたり、選考委員の瀬戸内寂聴氏から「もし書くんだったら、本気で書かないとだめだよ。」と言われたりしたからでした。高校の教科書に要約が掲載されている「草之丞の話」は、1987年に小さな童話大賞を受賞しています。

江國氏の作品は、「号泣する準備はできていた」（直木賞受賞）、「犬とハモニカ」（川端康成文学賞受賞）など多数あります。

中島 京子（なかじま きょうこ）と「ハブテトル　ハブテトラン」

東京都　1964年3月23日生まれ

両親がフランス文学者で大学教授だった中島氏は、幼い頃、まどみちお氏の「あいうえお絵本」で言葉遊びの面白さを体験し、まわりにあるたくさんの本を読んでいたそうです。

東京女子大学文理学部史学科に入学すると、小説家になろうと思い、高校生を主人公にした青春小説のようなものを書いていました。 大学卒業後は、半年間ほど英会話学校に通い、アメリカのワシントン州に教育実習生として1年3か月ほど滞在しました。帰国後は、5年ほどかけて田山花袋の「蒲団」を題材とした「ＦＵＴＯＮ」を書き上げ、作家デビューしました。

「ハブテトル　ハブテトラン」は、広島県福山市の方言です。「ハブテトル」とは、備後弁で「すねている。むくれている。」という意味で、「ハブテトラン」はその否定形です。不登校の小学5年の少年が、東京の両親と離れ福山市の祖父母と一時期を過ごす物語です。

中島氏の作品は、「小さいおうち」（直木賞受賞）、「妻が椎茸だったころ」（泉鏡花文学賞受賞）、「長いお別れ」（中央公論文芸賞・日本医療小説大賞受賞）など多数あります

（あとがき）

今年は124年ぶりに節分が2月2日、そして立春が2月3日でした。何だか春が少し早く来たような気持ちでしたが、朝晩はまだまだ寒い日があります。しかし、少しずつ桜の蕾が膨らんでいたり、柔らかい風を感じたりと、春を感じる日が多くなりました。学校現場では、『卒業式』に向かっての準備が始まっていることと思います。今年の卒業生は、コロナ禍の中で最高学年として1年を過ごし、今まで何気なく聞いていた、見ていた、読んでいた言葉が心に響くこともあったのではないでしょうか。これからたくさんの素敵な言葉に出会う読書をしてほしいと願っています。　（足立）

図書館員のひみつの本棚　第178回

　今月はカーネギー賞を受賞し、23か国で翻訳されている歴史改変SF小説です。

『マザーランドの月』

サリー・ガードナー／著　三辺　律子／訳　小学館　2015年　￥1500（税別）

＜お勧め年齢＞

乳幼児☆☆☆　小低学年☆☆☆　小中学年☆☆☆　小高学年☆☆☆　中学生★★★

高校★★★　一般★☆☆

（★が多い年齢の子どもにお勧めです。）

<本の紹介>

　物語の舞台はもうひとつの1956年。主人公の少年スタインディッシュの住む国を支配するマザーランドは、自分たちの力を世界に示すために人類初の月面着陸計画を立てていた。

　正式なマザーランド市民でない者が、監視を受けながら生活する＜ゾーン7＞。そこに住むスタインディッシュの家のとなりに、ある日、ヘクターという少年の家族が移り住んでくる。ヘクターの両親も、いなくなったスタインディッシュの両親同様、マザーランドに逆らったのだ。スタインディッシュとヘクターは親友となるが、ある日、二人で遊んでいたサッカーボールが立ち入り禁止の塀の向こう側へ行ってしまう。スタインディッシュはボールをあきらめたが、あきらめきれずボールを探しに行ったヘクターはそこでマザーランドの秘密を知ることになる。

<子どもに手渡す時のポイント>

　ハッピーエンドとは言い難いラストを迎えますが、徐々に真相が暴かれていくストーリーと、魅力的な登場人物に引き込まれ、最後まで目が離せない物語です。ぜひ、中学生、高校生に手渡してもらいたいと思います。

発　行：福岡市教育委員会 総合図書館　図書サービス課
電　話：０９２－ ８５２－ ０６３９
ＦＡＸ：０９２－ ８５２－ ０８０１